

いもう 葦毛通信

平成 26 年 7 月 8 日
豊橋市文化財センター
TEL : 0532-56-6060

No. 12

1、2014モニタリング報告-2

今年は空梅雨で雨が少なく葦毛湿原も乾燥気味です。それでも、昨年とは違った変化も見られます。昨年はアカメガシワがたくさん発芽し、1500 個体以上を除去しましたが、今年は少ないようです。代わりに、裸地を好む外来種が目立つようになり、随時除去しています。また、開花数がめだって増えた植物があります。裸地の外来種は木を伐って裸地化したことによる影響であることは明らかですが、開花数が増えた植物が植生回復作業の影響であるかどうかはまだ分かりません。今後も観察を続けたいと思います。

ノハナショウブ

今年はノハナショウブがたくさん開花し、6月18日には178輪を確認しました。湿原のあちこちで増えているようで、例年の2~3倍ほどはありそうです。小さくて分かりにくいですが、この写真の中に36輪咲いています。



ノハナショウブ(6/12)

モウセンゴケ、トウカイコモウセンゴケ

モウセンゴケとトウカイコモウセンゴケも昨年より目立つようになりました。花の盛りは過ぎたようで、例年より開花が早いようです。まだ8月頃までは花が見られると思います。

コバノトンボソウ

D地点で昨年は8株が復活しましたが、今年はさらに数が増えて分布範囲も広がり、18株を確認しました。今後も増えてくれることを期待しています。



モウセンゴケ、トウカイコモウセンゴケ (6/21)



コバノトンボソウ(6/25)

外来種

植生回復作業で大規模に木を伐って裸地化したところ（C・G地点）では、ダンドボロギク（北米原産）、ベニバナボロギク（アフリカ原産）が目立って増えています。いずれも裸地に現れる先駆植物ですが、外来種なので葦毛湿原調査員が随時除去しています。相変わらずメリケンカルガヤ（北米原産）も見られ除去した数は数百個体になっています。これらの種はいずれも風で種子が遠くから飛ばされてくるので、根絶することが難しく、できるだけ初期段階で随時除去するという方法しかないようです。



ダンドボロギク (6/25)

2、各地点の状況

C地点

実験的に2×5mほどの範囲の表土を剥いだところは、わずかですが変化が見られました。表土を剥いだ直後（3/18）はまだ薄く土が残っていましたが、雨に叩かれて流れてしまい礫が目立つようになりました（5/1）。わずかに残った土からはハルリンドウが数個体発芽し花を咲かせました。また、残っていたネザサの根から発芽しましたが、その他の植物はほとんど見られませんでした。しばらくすると実験区の両側から土が新たに流れ込み、そこからトウカイコモウセンゴケがたくさん発芽しました（7/6）。



3月18日

5月1日

6月8日

7月6日

発芽したトウカイコモウセンゴケは、小さいもので直径1cmほど、大きいものでも3cmほどです。また、表土を剥いだ実験区の両側はネザサやヌマガヤを刈り取っただけですが、トウカイコモウセンゴケが目立って増えました。日照が確保されたためと思われます。

表土をすべて剥ぐと裸地になり、湿地の始まりの状態にリセットされます。周りに土が残っていれば、そこから埋土種子が供給され、湿地が復元されて新たな遷移が始まると考え



発芽したトウカイコモウセンゴケ

られますが、大規模に表土を剥げば埋土種子の供給先から遠く離れることになり、湿地としての復元が遅くなる可能性も考えられます。

G地点

水位確認のための試掘穴は、水が満水状態になってからほとんど変化がありません。地表ぎりぎりまで水が溜まっており、穴から流れ出すという状態ではありません。降水量との関係は少ないようで、ほとんど一定の水量を保っています。フミン酸が溜まっているのか、あるいは鉄分が多いのか分かりませんが、穴全体が茶色くなっています。これまでガムシのような水棲昆虫やヒルが見られましたが、7月6日にはニホンイシガメがいました。移動の途中で休んでいたのだと思います。



試掘穴

I地点

I地点西側の木道沿いは、ミズゴケを剥いですぐに水の流れが復元され、現在でも安定して水が流れています。植物はヌマガヤやイの仲間がまばらに出てきましたが、多くありません。水の流れの中では、5月頃にホトケドジョウが良く見られました。

下流のA地点近くはやや広くミズゴケを除去したところです。作業直後は残った土が洗い流され小さな礫が目立つ裸地になった部分がありましたが、現在は土が溜まり、裸地の部分が目立たなくなっています。



4月9日



5月22日



4月19日



7月6日

7月6日の写真の左下には土が溜まり、ミミカキグサが数多く出ています。既に開花したものも見られ、これから順次各種のミミカキグサが咲いていくと思われます。

I 地点西側のミズゴケを剥いだ所では水の流れが復元されましたが、その流れの底に茶色の物質が溜まるようになりました。フミン酸だと思われます。水溜り状になって水が流れないところの表面では、油のような金属光沢をした膜状になっています。見学者の方が、油が浮いていると話しているところに何度も遭遇しましたので、現地にフミン酸の説明看板を立てました。



I 地点西側下流のミミカキグサ

フミン酸(腐食酸)

フミン酸は植物が微生物によって分解され、水に溶けない不溶性の状態に残った酸性の高分子有機物で天然の物質です。茶褐色をして、水が流れている所に溜まっています。澱んで水が流れず溜まり水になっている所では、水の表面に金属光沢のある膜状になって浮かんでいます。これが油のように見えている部分ですが、油ではありません。

葦毛湿原では、植生回復作業によって表土を剥いで水の流れが復活したところで目立つようになりましたが、葦毛湿原には以前からあった天然の物質で、目立つようになったのは、昔の環境が戻ってきた証拠だと思われます。



フミン酸

F地点

3か所の播き出し実験区では植物の発芽が見られましたが、発芽の度合いが異なっています。A区（B地点島状部の表土下の礫層の土）では数個体、B区（I地区のヌマガヤの下の土）では20個体ほど、C区（I地区西側のミズゴケの下の土）では一面に発芽しています。まだ、植物の種は同定できていませんが、C区のミズゴケの下の土が最も多く発芽し、明らかに違いが見られます。埋土種子の種類と量がかなり違うということは分かりましたので、今後植物の種類を同定して、埋土種子をどのように利用するかを考える参考にしようと思います。



A区

B区

C区